

イタリア語における非人称の *si* と受動態の *si* の構文 —特に変則的な一致について—

山本 真司

1. はじめに

本稿では、イタリア語における、主語が不定あるいは不特定であることを示す接語 *si* を用いた構文¹ (いわゆる非人称の *si* と受動態の *si* の構文)、特に変則的とされるある現象を取り上げる。それは、明らかに直接目的語の形態を帯びていると見えるものが、主語と同じように動詞との文法的一致を起こすというものである。いくつかの先行研究やいわゆる広文典に依拠して、現象の輪郭を明確にし、解釈のヒントとなる視点を提案したいと思う。

2. イタリア語の人称代名詞について

まず最初に、本稿の議論の過程でたびたび触れることになる、イタリア語における人称代名詞の接語形の問題に簡単に触れておきたい。

イタリア語は、ロマンス諸語に広く見られるように、人称代名詞に、強形と弱形の2つの系列の区別がある。強形は、発音上は強勢形 *tonica*²、統語論的には自由形または独立形 *libera*、意味的には強調形であり、弱形は、発音上は非強勢形 *atona*、統語論的には接語形 *clitica*、意味的には非強調形である (そのため、ある特定の形態をどの観点からの呼称で呼ぶかという命名上の問題が生じるが、本稿では、不適切な混用は避けつつも、これらの名前を適宜使い分けることとする。特に特定の観点からの名称を選ぶ必然性が薄い場合には、「(人称代名詞の) 接語形」あるいは「接語」*clitico*、という名称を使うことにする)。

例えば、「ルチーアは私を愛する」とイタリア語で言うには、この2つの系列の代名詞を使い分けることにより、少なくとも、

(1) *Lucia ama me.* [強形を使った形]

(*Lucia* 人名, *ama* 「(彼、彼女は) 愛する」 [*amare* の直説法現在3人称単数形], *me* 「私を」
[人称代名詞1人称単数対格³ 強形])

¹ 後に見るように、非人称の *si* の構文と受動態の *si* の構文の区別が必ずしもはっきりしない領域が存在することを提示するのが本稿の目的の1つであるので、この2つの構文を分けずに、両者を統合するような名称として、このような言い方をすることにする (筆者は、過去に何度か、そのような名称として「不特定の *si*」という言い方をういたことがあるが、後にこの言い方には誤解を招きやすい問題が含まれていることが判明したので、本稿では用いなかった)。ただし、そのような統合的な扱いが妥当かどうか未だ十分に明らかでないため、これはあくまでも暫定的な言い方である。

² *tonica*, *libera*, *atona*, *clitica* は、形容詞で、潜在的な被修飾語として女性名詞「形」*forma* を前提にしている。男性名詞である「代名詞」*pronomine* を使えば、男性形で *tonico*, *libero*, *atono*, *clitico* となる。

³ イタリア語の人称代名詞では、強形・弱形の区別に加えて、不完全ながら与格・対格の区別もある。し

(2) Lucia mi ama. [弱形を使った形] (mi「私を」人称代名詞1人称単数対格弱形)

の2通りの言い方が可能である⁴。

ところが、現代の標準的なイタリア語においては、主語となる諸形(主格形)はこのような2つの系列の対立をほとんど欠き、もっぱら強形のみが存在する⁵。たとえば、「私は君のことを愛している」とイタリア語で言う場合、(便宜上「君」のほうは弱形で統一するとして)、「私」に相当する強形の代名詞を用いた形：

(3) Io ti amo. [ioは強形]

(io「私は」[人称代名詞1人称単数主格強形], ti「君を」[人称代名詞2人称単数対格弱形], amo「(私は)愛している」[amareの直説法現在1人称単数形])

は存在するが、これに対応するような、「私」に相当する弱形の代名詞を使った形というのは存在しない。意味の上からは非強調が要請されるような場合には、よく知られているように、ゼロ形式が立つ。

(4) ϕ ti amo. [主語の部分はゼロ] (ϕ はゼロ形式を示す)

後に見るように、本稿で取り上げる si の問題においても、この人称代名詞主格弱形の欠如という特徴に注目することが必要となってくるであろう。

なお、現代フィレンツェ方言、また(イタリア語の近縁の諸語を挙げれば)北イタリア諸方言やいわゆるレト＝ロマンス諸語の多くには、人称代名詞主格にも弱形(接語形)が存在しており、それがさまざまな統語論的・意味論的現象に重要な役割を果たしている⁶ことが知られている。そう考えると、この人称代名詞主格弱形の欠如という現象は、今日の文法書では明示的に取り上げられることはあまりないが、実は、現代イタリア語(共通語)を特徴付ける重要

たがって、文法書・教科書などでイタリア語の人称代名詞の体系を語るのに、主語人称代名詞(人称代名詞主格)に直接補語形(対格形)および間接補語形(与格形)を対置する記述の仕方がかなり普通となっているが、この方法だと、強形・弱形の対立が浮き彫りにされないという問題がある。

⁴ ただし、語用論的な観点から言えば、前者は、後者に比べて、有標な形であると考えられ、適切な文脈におかれないと、奇異な感じと捉えられることが多い。

⁵ ただし、書き言葉のスタイルの言語において用いられる幾つかの代名詞(3人称の *egli, ella, esso, essa, esse, essi*)は、一応、自由形ではあるが、弱形および接語形としての特徴も一部持っていることが知られている。

⁶ ごく簡単に説明すると、フィレンツェ方言では、すべての人称に人称代名詞主格弱形が存在し、その使用は1人称単数を除いて義務的で、なおかつ、強形の主語が存在する場合でも人称代名詞主格弱形を省くことは許されない(つまり両者は重複して使用される)。鈴木(1991)にしたがって動詞 *parlare*「話す」の直説法現在形に強形・弱形の両方を重複して付けて示すと次の通り(斜字体が弱形)：

単数 1人称 *io e parlo*, 2人称 *te tu parli*, 3人称 *lui e parla (m.) / lei la parla (f.)*

複数 1人称 *noi si parla*, 2人称 *voi vu parlate*, 3人称 *loro e parlano (m.) / loro le parlano (f.)*

なお、フィレンツェ方言の他に、人称代名詞の全ての人称・数に弱形が備わっていて(強形との重複も含む)義務的使用が行われる言語として有名なものには、フリウリ語中部方言が挙げられる。

な現象の1つであると言えよう⁷。

3. 非人称の si と受動態の si

スペイン語やポルトガル語など他の幾つかのロマンス諸語と似て、イタリア語では、再帰代名詞3人称弱形と同形・同語源の接語（不変化）si を動詞の3人称形の前に置くことによって、主語が不定あるいは不特定であることを示すという構文が存在する。この構文は、直接目的語の有無、および動詞と意味上の直接目的語との一致の有無によって、非人称構文および受動態構文の2種類に分かれるとされる⁸。

動詞に付随する直接目的語がない場合、動詞は3人称単数に置かれ、この場合、文は一種の非人称構文とみなされ、この si は「非人称の si」と呼ばれる。

(5) Si parla spesso di riforme.

「人はしばしば改革について語る⁹」 (Salvi - Vanelli 1992, p.42)

(si 非人称の si, parla 「話す」 [parlare の直説法現在3人称単数形], spesso 「しばしば」, di 前置詞「について」, riforme 「改革」 女性名詞 riforma の複数形)

直接目的語がある場合、動詞はこの直接目的語と性・数の一致をし、直接目的語が文法上の主語と扱われているとみなされる。そのため、一種の受動態文と見なされ、接語 si は「受身の si」と呼ばれる。

(6) si mangiano le mele. (Salvi - Vanelli 前掲書, p.36) 「りんごが食される」

(si 受身の si, mangiano 「食べる」 [mangiare の直説法現在3人称複数形],

le 定冠詞女性複数形, mele 「りんご」 女性名詞 mela の複数形)

[複数形 le melle に一致して動詞も (si) mangiano と複数となっている]

このような動詞とその意味上の直接目的語の間の一致を伴う構文に加えて、(強形の¹⁰) 直接目的語が存在しそれが文法的に複数であるにもかかわらず、動詞はそれと一致せず3人称単数形のままで留まる場合があることが知られている。例 (7) のような文である。このような構文を非文法的とみなす話者もあり、規範論的観点からはその価値について文法家の意見が分かれ

⁷ 主格以外の人称代名詞接語形は、再帰態や中動態を形成する役割も担っているなど、イタリア語の特徴的な構造を作り上げるのに重要な役割を果たしているため、文法では重要視される一方、そもそも現代イタリア語ではせいぜい痕跡的にしか残っていない主格の人称代名詞接語形が大きく取り上げられないことは、当然といえば当然であるが。

⁸ この2つを1つのものとして扱う文法書も存在するようだが、本稿では、とりあえずこの両者を区別して扱い、その上で、その両者の区別がどのような場合に限界に達するかを論じたい。

⁹ 以下、非人称・受動態の区別をはっきりさせるために、直訳調で問題の多い方法であるが、便宜的に、概ね、前者には「人は…」、後者には「…される」という訳を当てることにする。

¹⁰ 「強形の」とは、人称代名詞強形やその他の名詞句により構成されているという意味である。

ているが、本稿では、このような構文が（少なくとも一部のイタリア人にとっては）存在する¹¹ ことを認めた上で議論を進める。

- (7) Si mangia le mele. (Salvi - Vanelli 前掲書, p.36) 「人はりんごを食べる」
(si 非人称の si, mangia 「買う」 [mangiare の直説法現在 3 人称単数形])

このような文では、動詞が 3 人称単数形のままで留まっており、明らかに複数形のものを出している意味上の直接目的語 (le mele) は主語として扱われているとは言えず、受身の文とは考えられないので、非人称の si の構文の一種と見なすことにする。動詞が 3 人称単数形であることも、非人称の si の構文としての特徴のゆえであると考えことにする。

以上をまとめると、

- ・ 動詞が常に 3 人称単数形で変化しないのが非人称の si の構文
- ・ 動詞が (文法上の主語として扱われる) 直接目的語と文法上の一致を起こすのが受動態の si の構文

ということになる。

非人称の si と受動態の si の区別に関係するもう 1 つの現象は、直接目的語の代名詞化に関するものである。非人称の si の構文では、直接目的語を (特に強調の必要のないケースにおいて)¹² 人称代名詞で表す場合、それは能動態の構文におけるのと同じく対格 (接語形) で表され、接語 si の直前に置かれる¹³ (次の 4 つの例文は、みな、Lepschy - Lepschy 1981, p.198 より引用)。

- (8) La si compra. 「人はそれを買う」
(la 「彼女・それを」 [人称代名詞 3 人称単数女性対格弱形], si 非人称の si, compra 「買う」 [comprare の直説法現在 3 人称単数形])
- (9) Lo si vede. 「人は彼を見る」
(lo 「彼・それを」 [人称代名詞 3 人称単数男性対格弱形], vede 「見る」 [vedere の直説法現在 3 人称単数形])

¹¹ Benincà - Vanelli (1984, p.184) が伝えるように、一般にはトスカーナ語法であると言われる。ただし、方言・地方語においては類似の現象は珍しくないで、その影響を受けたいわゆる「地方的イタリア語」italiano regionale のレベルでは、1つの地域に限定されることなく、広く見られる現象なのではないかと疑われる。

¹² ここに書かれているような直接目的語を人称代名詞化する操作が成り立つためには、その要素が特に強調する必要がないことを想定する必要があるはずだが、Lepschy - Lepschy (1981) — および同じような代名詞化について触れている Cardinaletti (2009) も — はこのような想定について明言していない。

¹³ ちなみに、この語順は、非人称の si の構文を、再帰代名詞の構文から区別するしるしの 1 つとなる。後者の場合、現代イタリア語では、語順は「再帰代名詞 + 対格の接語形人称代名詞」という語順になり、再帰代名詞の母音は i から e に変化する (si compra + la > se la compra 「自分のためにそれを買う」となり、非人称の si の文とは語順・語形とも異なる。

(10) *Mi si vede.* 「人は私を見る」

(*mi* 「私を」 [人称代名詞 1 人称単数対格弱形])

(11) *Ti si vede.* 「人は君を見る」 (*ti* 「君を」 [人称代名詞 2 人称単数対格弱形])

(12) *Le si compra.* 「人はそれらを買う」

(*le* 「それらを」 [人称代名詞 3 人称女性複数対格弱形])

それに対して、受動態の *si* の場合、意味上の直接目的語は文法上は文の主語と見なされているはずであるから、それを人称代名詞で表すとすれば、主格が使われるはずである (なお、主語の位置は、動詞の前と後ろと 2 通り考えられるが、ここでは前者の場合を考える¹⁴)。先に見たように、イタリア語の主格の人称代名詞には接語形は存在しないから、文脈上許されるならば自由形を用いることになるが、非強調形が要請される場合には、ゼロ形式が立つことになる。Salvi - Vanelli (前掲書, p.36) は、例文 (6) について *le mele* を代名詞化した結果として (13) を掲げている。

(13) (*esse*) *si mangiano* 「(それらは) 食べられる」

(*esse* 「それらは」 [人称代名詞 3 人称女性複数主格強形])

ところで、例文 (13) において主語 *esse* が動詞の前に来ているという事実は、受動態の *si* の構文の特徴を、そしてひいては非人称の *si* の構文とのもう 1 つの違いを示している。受動態の場合、意味上の直接目的語は文法上の主語として扱われるので、文の主語の常として、これを文頭に立てるには、位置の移動以外、特別な手続きは要らない。従って、例えば、Salvi - Vanelli (前掲書, p.36) は、(6) とともに、*le mele* を移動した次のような文も可能としている。

(14) *Le mele si mangiano.*

それに対して、非人称の *si* の構文の場合、意味上の直接目的語は文法上も直接目的語として扱われ、これを動詞の前に移動することは一種の左方転移と考えられるはずなので、転移された要素を受け直す接語形の人称代名詞の出現が予想される (イタリア語では、左方転移された直接目的語を改めて接語形の人称代名詞で受け直すのが義務的である)。したがって、例えば、(15) のような文における対格の人称代名詞 *le* の存在は、そのような左方転移と受け直しのプロセスを想定させ、文頭に立っている名詞句 *queste parole* が直接目的語として扱われていることを示している。

(15) *Queste parole le si legge sui volti di tutti.*

「これらの言葉が皆の顔から読み取れる」¹⁵

(*queste* 「これらの」 指示形容詞女性複数形, *parole* 「ことば」 女性名詞 *parole* の複数

¹⁴ *si* は接語であるから動詞と一体となっていると考えられるため、ここで言う「動詞の前」とは、*si* よりも前の位置である。

¹⁵ <http://www.steresa.org/ARCHIVIO/bollettini/Boll725del12.09.2004.htm> より引用。

形, sui 前置詞 su 「の上に」 + i 定冠詞男性複数形, volti 「顔」 男性名詞 volto の複数形, di 前置詞 「の」, tutti 「皆」 不定代名詞男性複数形

4. 非人称の si と受動態の si の中和

ここまでは、非人称の si の構文と受動態の si の構文はあくまでも2つの異なったものであるという前提に立って話を進めてきた。しかし、一見するところ、この2つの区別がつかないように見えるケースも存在する。

例えば, Lepschy - Lepschy (前掲書, p.195) が述べる通り, 次の (16) のような, 直接目的語が存在してそれが単数形で, なおかつ動詞が3人称単数形である場合, 文は両義的となる。

(16) Si compra una penna. 「人はペンを一本購入する」 / 「ペンが一本購入される」

(una 不定冠詞女性単数形, penna 「ペン」 女性名詞単数形)

このような場合, 動詞が3人称単数形になっているのは una penna と一致しているから (受動態的解釈) なのか, 非人称の si の構文では動詞の形が不変的に3人称単数に固定されることになっているから (非人称的解釈) なのか, どちらの可能性も否定できない。本稿では, Lepschy - Lepschy (前掲書, p.195) や Cardinaletti (前掲書, p.31-32) にならい, このような場合でも, 非人称と受動態という2種類の構文の存在を想定し, 両者の形態の間に一種の中和が起こっていると考えることにする。

このような中和が起こっている場合にも, 前章で見た, 直接目的語の人称代名詞化を施せば, 2種類の構文の違いが再び明らかになる。Cardinaletti (前掲書, p.32) は (17) のような文に対して, (17a) (17b) の2つの文が対応することを指摘している。非人称の構文 (il manoscritto は直接目的語) を想定すれば (17a) のような文が, 受動態の構文 (il manoscritto は主語) を想定すれば (17b) のような文が出てくることになる。

(17) In quella biblioteca si può leggere il manoscritto.

「その図書館ではその写本を読むことができる」

(in 「のなかに」, quella 「その」 指示形容詞女性単数形, biblioteca 「図書館」 女性名詞単数形, può 「できる」 [potere の直説法現在3人称単数形], leggere 「読む」 [動詞不定詞], il 定冠詞男性単数形, manoscritto 「写本」 男性名詞単数形)

(17a) In quella biblioteca lo si può leggere.

(17b) In quella biblioteca ϕ si può leggere. (ϕ はゼロ形式を示す)

5. 対格形との変則的な一致

今度は, 中和の現象とはまた別の意味で, 非人称の si と受動態の si の間の区別が困難になるような事例を取り上げたい。それは, 直接目的語が接語形の対格で表され si の前に置かれる構文 (「対格接語形 + si+ 動詞」) に関わるものである。このような構文の場合, 接語形人称代

名詞は、直接目的語の特徴的な形である対格形を帯びているのだから、文法的には主語と見做すことは不可能で、これが単数であろうと複数であろうと、動詞の形は常に3人称単数形で変化がないはずである。

(18) *Le si compra.* (Lepschy - Lepschy 前掲書, p.197)

ところが、このような場合にも、動詞が直接目的語に一致して動詞が複数形になることがあることが知られている。Lepschy - Lepschy (前掲書, p.197) は「よりまれであるが」*meno comunemente* と断っているが、

(19) *Le si comprano.* (Lepschy - Lepschy 前掲書, p.197)

語順 (あるいは *si* の前の接語の存在) はこれを非人称構文と見做すことを要請しているようではあるが、動詞が直接目的語と一致して3人称複数に置かれている点は受動態の構文と共通している。しかし、直接目的語が元の直接目的語のままの形と位置を保っていることが受動文としての解釈をためらわせる。*si* を用いた構文を受動態の構文と非人称の構文に分けると、この文はどちらにも帰属できないことになってしまう。

なお、「接語形人称代名詞 + *si* + 動詞3人称形」という構文 (本稿では非人称と解釈可能であると考えられる動詞が単数形の場合も含めて) における、*si* の前に立っている接語形人称代名詞を、対格ではなくて主格であると解釈する説明が¹⁶、いくつかの少し古い文法書には見出される¹⁶。これは、人称代名詞主格弱形が存在するフィレンツェ方言の状態に基づくものである。もしその通りであるならば、(19) のような文も、弱形の主語と動詞との一致ということで片がつくことになる。

しかし、Lepschy - Lepschy (前掲書, p.198) が言うように、この解釈は (少なくとも現代の標準イタリア語に適用するには) 無理がある。そもそも現代イタリア語には人称代名詞主格弱形は存在しないし、また、例文 (9) *lo si vede*, (10) *mi si vede*, (11) *ti si vede* などのような、イタリア語では全く文法的でも (フィレンツェ方言の) 人称代名詞主格弱形の形 (注6 参照) としては解釈不可能な諸形を排除してしまうことになるからである¹⁷。

6. 先行研究

年代的に見ると、この「変則的な対格形との一致」の問題についての初めての科学的また詳細な記述は、Lepschy - Lepschy (前掲書) の中のものではないかと思われる。これは、非人称の *si* および受動態の *si* 一般についての説明であるが、規範的な意識に縛られずにこの現象を詳細に記述し、また、これを前述のようなトスカーナ語法に基づく無理な解釈から解放してイタリア語としてきちんと位置づけたという意味で、この問題の研究の出発点をなしていると言え

¹⁶ 例えば Goidanich (1967) [初版 1917 年]

¹⁷ 事実、Goidanich (上掲書 p.301) は、*lo si dice* の形を、誤用であるとしている。

る。しかし、この現象は何なのか、どうしてこのような現象が起こるのか、などについては、積極的に述べていない。

非人称の *si* および受動態の *si* の問題を生成文法の立場から総合的かつ詳細に扱った最近の研究としては、D'Alessandro (2007) があるが、これは、*Li si mangiano* のような形は非文法的である（動詞との一致が起きるのは主語とであって直接目的語とであってはならないから）という前提に立っている¹⁸ ために、残念ながら、本稿の議論に直接的な形で役立たせることはできないと思われる。

最近の研究としては、Cardinaletti (前掲書) がある。Cardinaletti は、この「変則的な対格形との一致」の問題についてさまざまな研究者・文法家の間に意見の一致がないことを確認し、独自の聞き取り調査によって、イタリア語話者の間でもこの構文の文法性およびその文体論的価値に関して判断が一律でないことを述べ、この構文を文法的であると判断した話者がおおむね北部の人であったことから、人称代名詞主格弱形（これは当然、動詞と一致する）を持つ北方方言からの干渉が原因ではないかと結論付けている。

Cardinaletti の結論について詳細に検証することは本稿の目的ではない。また、方言からの干渉がこの現象の原因であるという説がたとえ正しいとしても¹⁹、その仕組みを、イタリア語の一部となってしまうものとして、構造的・共時的に分析・記述する必要はやはり残るであろう。

いずれにせよ、この Cardinaletti の考察も、やはりこのような構文が変則的なものであるという考えを前提にしており、事実、このような文は理論的な観点からは予想外のものである (Cardinaletti 前掲書, p.36) と述べている。確かに、対格に置かれている要素と動詞の活用語尾との間の一致という点では、変則的なものと言えるであろう。しかし、以下に見ていくように、別の観点から見ると、この現象は、イタリア語の構造の中で、変則的なもの・孤立した現象とばかりは必ずしも言えないのではないかとも思われるのである。

7. 対格という形の意味

意味上の直接目的語（生成文法で言えば動詞の内項に由来する要素、関係文法で言えば始発層で2であった要素）が最終的に主語として現れてくるということだけならば、非対格構文として知られる諸構文（その中には、受動態や能動態/中動態のいわゆる「使役交替」によって作られる中動態文のように、直感的にも主語が直接目的語に由来すると了解するのが困難ではな

¹⁸ D'Alessandro (2007, p.59)

¹⁹ 山本としては、イタリア語に関しては、このような現象が方言からの干渉の結果であるというのは十分あり得ることだが、それ以外の理由で同様の現象が生じている言語が存在することも可能であると思っている。事実、フリウリ語の幾つかの方言には、非常によく似た現象が存在することが確かめられている (Yamamoto 1993)。ちなみに、フリウリ語の人称代名詞主格のシステム、特に非人称接語と他の接語との位置関係は、近隣の北方方言ともイタリア語とも異なっており、Cardinaletti の説明を単純にフリウリ語に流用することはできないと思われる。

いものもある) に既に見られることである。

しかし、例文 (19) のような構文が観察者に居心地の悪さを感じさせるのは、これらの代名詞が明らかに、対格という直接目的語に特徴的な形態を残しながら、動詞の活用語尾と(本来ならば主語と起きるような) 文法的な一致を起こしてしまっているところである。

しかし、一種の開き直りのようであるが、あえて問うてみよう: si の構文において、動詞と文法的な一致を起こす要素が、直接目的語に特徴的な形をしていることは、そんなに奇異なことなのだろうか。この問いの意味は、非対格仮説の出発点にあった発想を見直してみると明らかになると思う。

非対格仮説に関する研究の初期に、問題となる諸現象を、いささか不適切に「能格的」という表現で表していた(表わす研究者がいた)ことをいまだ御記憶の方も少なくないであろう(その不適切な点はすでに十分に批判されているのでここではいちいち取り上げない)。このような表現が生み出された原因は、「他動詞の主語が自動詞の主語とは異なった格(能格)で表わされ、他動詞の直接目的語が自動詞の主語と同じ格(主格)で表わされる」という現象が認められる諸言語(例えばバスク語)に、イタリア語(別にイタリア語だけではないか)もある意味で似ている、という認識であった。

より具体的に言うと、ある種の構文における主語が、他動詞の直接目的語とよく似た扱いを受ける(あるいは振舞い方をするととっても良いであろう)という認識である(もっとも、イタリア語においては、格の体系はラテン語などに比べて非常に縮小したものとなっているし、また、「能格」とみなせるような格形が形態論上存在しているわけではないので、このよく似た点というのは、よく知られているように、主に、統語論や性・数に関する一致などにかかわるものであった)。ともあれ、ここで重要なのは、従来、主語と直接目的語は別のもの、区別されたものと考えられてきたのが、ここに及んで、主語でありながら直接目的語の性質を持つものが存在する²⁰という点が確認された、ということである。

別の言い方をすれば、主語と直接目的語の両方の性質を持ったものが存在しても良い、ということになる。ならば、ここで問題にしている si の構文におけるように、動詞と一致する人称代名詞が直接目的語に特有の形をしていても、不可解なことと思う必要はないであろう。

8. 分格の ne

もっとも、イタリア語に関する非対格理論において論じられてきた、自動詞の主語における直接目的語と共通な性質というのは、主に、統語論の観点から見たものであるが、本稿で検討している「対格接語形 + si + 動詞」の構文で問題となっているのは、対格形という形態である。

²⁰ もっとも、この事実は、主語には、2種類の違ったもの(外項に由来するものと内項に由来する)が存在する、あるいは、どの種類の主語を取るかによって自動詞は2種類(非能格動詞と非対格動詞)に分かれる、という観点から提示されることが多いようではあるが。

さてそれでは、ほかにも、形態の点で主語が直接目的語の特徴を残している事例があるであろうか。実は、そうであると思われる現象が少なくとも1つある（実はよく知られた現象であるが、主語が直接目的語の形を示しているという観点から取り上げられることはあまりないように思われる）。それは、接語形代名詞 *ne* を含む非対格構文の事例である。

接語形代名詞 *ne*（正確にはそのさまざまな用法のうち、分格の *ne* と呼ばれるもの）²¹ は、数量表現の中心となる語や、不特定数量を表す語を承けたりするのに用いる。例えば、次の例 (20) の中の *ragazzi* あるいは例 (21) の *dei ragazzi* を *ne* で置き換えると、(20a) や (21a) のような文となる（Salvi - Vanelli 前掲書, p.19）

(20) *Ho visto molti ragazzi* → (20a) *Ne ho visti molti.*

「私は大勢の少年を見た」 → 「私は大勢見た」

(*ho visto* 「私は見た」 [*vedere* の近過去 1 人称単数], *molti* 「多数の」不定形容詞男性複数形, *ragazzi* 「少年」男性名詞 *ragazzo* の複数形, *ho visti* 「私は見た」 *ho visto* の語尾が男性複数形の直接目的語と一致したもの)

(21) *Ho visto dei ragazzi.* → (21a) *Ne ho visti.*

「私は何人かの少年を見た」 → 「私は何人か見た」

(*dei* 「幾つかの」部分冠詞男性複数形)

これらの構文に見られるように、分格の *ne* は、基本的には、(能動態の文の) 直接目的語を構成する句の一部として用いられる。そのため、非対格構文の主語を構成する句の一部として用いることもできる。したがって、例 (22) における *sottomarini*、例 (23) における *degli orsi*、例 (24) における *case popolari* を、それぞれ *ne* で置き換えて、(22a) (23a) (24a) のような文をつくるのが可能である。（Salvi - Vanelli 前掲書, p. 20）

(22) *Sono affondati molti sottomarini.* → (22a) *Ne sono affondati molti.*

「たくさんの潜水艦が沈んだ」 → 「たくさん沈んだ」

(*sono affondati* 「沈んだ」 [*affondare* 「沈む」の直説法近過去 3 人称複数男性形], *sottomarini* 「潜水艦」男性名詞 *sottomarino* の複数形)

(23) *Sono stati visti degli orsi.* → (23a) *Ne sono stati visti.*

「熊が何匹か見られた」 → 「何匹か見られた」

(*sono stati visti* 「見られた」 [*vedere* の受動態直説法近過去 3 人称複数男性形], *degli* 「幾つかの」部分冠詞男性複数形, *orsi* 「熊」男性名詞 *orso* の複数形)

(24) *Si costruiscono case popolari.* → (24a) *Se ne costruiscono.*

²¹ *ne* には、分格的な意味のほか、副詞的な分離を表す用法、属格的な用法など、さまざまな用法がある。それらを、一括して説明する立場もあるが、本稿では、それらを1つとは考えず、一応、厳密に区別することにする。

「民家が建てられる」→「何軒か建てられる」

(*si* 受身の *si*, *costruiscono* 「建てる」 [*costruire* の直説法現在 3 人称複数形], *case* 「家」女性名詞 *casa* の複数形, *se* 受身の *si* の *ne* の前での異形態)

さて、(22a) (23a) (24a) の場合、*ne* は、文の主語ということになるが、これはよく考えてみると異例のことである。と言うのは、*ne* は弱形の代名詞であり、既に見たように、イタリア語では、主語となることができる人称代名詞は、原則として強形ものだけだからである。このような通常では起きないことが起きるのは、この代名詞がもともと直接目的語の形であったからに他ならない。すると、これは、直接目的語の特有の性質（この場合は形と位置）が、中動態や受動態の文の主語になっても保たれている例と言えるのではないか。

もちろん、この *ne* の事例だけでは、そこから問題解決のために何か直接的に役に立つものを引き出すことは難しいであろう²²。今のところ、このように考えれば、観点を変えることができるかも知れない、という問題提起にとどめておく。

9. 非人称の *si* と再帰動詞の組み合わせ

最後に、もう1つ、別のタイプの「変則的な」一致の例を見ておこう。

イタリア語では、非人称の *si* の構文は、再帰動詞にも適用することができる。たとえば *scambiarsi i regali* 「プレゼントを交換し合う」[相互的用法の再帰動詞]に、非人称の *si* をつけることができるのである。ただし、その場合、本来ならば、非人称の *si* と再帰代名詞の *si* と、*si* が2つ重なることになるところだが、**si si*... という結合はこのままでは許されず、これを *ci si*... という形に変えることが義務的であるとされる。

(25) *A Natale ci si scambia i regali.* 「クリスマスには人々はプレゼントを贈り合う」

(*a* 前置詞「に」、*Natale* 「クリスマス」、*scambia* 「交換する」 [*cambiare* の直説法現在 3 人称単数形]、*i* 定冠詞男性複数形、*regali* 「贈り物」男性名詞 *regalo* の複数形)

この文では、非人称の *si* の構文の常として、動詞は 3 人称単数形に置かれている。ところが、このような場合に、(*i regali* に合わせて) 動詞を複数形にする話者が存在する²³。

²² *ne* の事例の他に、山本は、不定詞を直接目的語として導入する導入辞 *di* が、受動態になっても残っていることがあることも直接目的語の形が受動態でも残る一例と考えられそうだと思っている (*mi hanno proibito di fumare* 「彼らは私に喫煙することを禁じた」→ *mi è stato proibito di fumare* 「私は喫煙することが禁じられた」) が、*di* が付いた不定詞と原形不定詞との使い分けにはまだ解決の難しい問題もあり、本稿で詳細を尽くすことはできないので、今回は註で簡単に触れるのみとした。

²³ *Yahoo! Answers Italia* には、"Perché a Natale ci si scambia regali?" (<http://it.answers.yahoo.com/question/index?qid=20091221063519AAf7Y08>) と並んで "Come mai per Natale ci si scambiano i regali e per Pasqua no?" (<http://it.answers.yahoo.com/question/index?qid=20100329000105AAGBkpg>) というコーナがある (動詞の単数形 *scambia* 複数形 *scambiano* の違いに注意)。また、<http://forum.wordreference.com/showthread.php?t=1179808> では、*ci si scambiano i regali* というのと *ci si scambia i regali* ではどちらが正しいのか、という議論が交わされるさまを読むことができる。そのほかにも、インターネット上では、*ci si scambia i regali* / *ci si scambiano i*

(26) A Natale ci si scambiano i regali. (scambiano は直説法現在 3 人称複数形)

また, Salvi - Vanelli (前掲書, p.37) は, 次の (25a) (25b) のような例を挙げ, (25b) を一応非文法的としながらも, これを (25a) よりも好む話者がいることを指摘している。

(27a) Ci si compra molte cose inutili. 「人はたくさんは無用なものを買う」

(27b) Ci si comprano cose inutili. 「同上」

(molte 「たくさん」 不定形容詞女性複数形, cose 「もの」 女性名詞 cosa の複数形, inutili 「無用な」 inutile の女性複数形)

(27b) のような文は, また違った意味で, 1 つの名詞句が, 直接目的語としての性格を保ったまま, 受動態の主語のように振舞っている事例 (直接目的語と動詞の間の一致が受動態の特徴であると言えるならば) といえるだろう。この場合, 直接目的語が完全な意味で主語とみなされることを妨げているのは, 再帰代名詞の存在である。再帰代名詞の定義からして, これが指示している要素が文の主語であるはずだが, それは明らかに意味上の直接目的語 (cose inutili) ではないからである²⁴。このような文は, 非人称でもあり再帰でもあり, 受動態でもある (と同時に厳密な意味ではこれら 3 つのいずれでもない) という様相を呈している。

10. まとめ

非人称の si と受動態の si に関する幾つかの現象を, 特に一致という点に注目しながら見てきた。特に本稿が「変則的な一致」と呼んだ現象を伴う構文は, 受動態とその他の態の狭間に存在していてそれらのいずれにも厳密には合致しないものであり, その解明には今までの態についての概念にとらわれない発想が必要であろう。

ただ, 有効な理論的枠組みを見つけることももちろん重要であろうが, 何よりも大切なのは徹底した調査・観察であろう。まずは各話者ごとに, 非人称の si および受動態の si に関して, 可能・不可能な構文のレパートリーをできるだけ正確にまた網羅的に調べ上げる必要がある。また, イタリア語のように地方差・地域差が少ない言語の場合, できるだけさまざまな地域の話者を調査することも大事である。このような調査の徹底ということについて言えば, ここ 2, 30 年で状況は大きく改善したとは言え, やるべきことはまだまだ多く残っているように思える。

regali 両方の用例が複数個見つかると。

²⁴ 再帰動詞の構造は, さまざまな言語理論で, 通常受動化を妨げるものと考えられている。関係文法でも, いわゆる形式的再帰動詞の直接目的語は, 最終層で失業者となるとされている。LaFauci (1988) 参照。

参考文献

- BATTAGLIA, Giovanni, 1985. *Nuova grammatica italiana per stranieri*, illustrazioni di Asun Balzola, 8. ed., Bonacci Editore, Roma.
- BENINCÀ, Paola, 1989. *Friaulisch: Interne Sprachgeschichte I. Grammatik. Evoluzione della Grammatica*, in HOLTUS, Gunter - METZELTIN, Michael - SCHMITT, Christian, (a cura di), 1989. *Lexikon der Romanistischen Linguistik (LRL)*, vol. III, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, pp. 563-585.
- BENINCÀ, Paola - VANELLI, Laura, 1982. *Appunti di sintassi veneta*, in CORTELLAZZO, Manlio, (a cura di), 1982. *Guida ai dialetti veneti*, vol. 4, CLEUP, Padova.
- BENINCÀ, Paola - VANELLI, Laura, 1984. *Italiano, veneto, friulano: fenomeni sintattici a confronto*, in *Rivista Italiana di Dialettologia.Scuola società territorio* a. VIII, numero unico, pp.165-194.
- BURZIO, Luigi, 1986. *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, Reidel, Dordrecht.
- CARDINALETTI, Anna, 2009. *si impersonale e dimostrativi: due casi di influenza dei dialetti sull'italiano?* in CARDINALETTI, Anna - MUNARO, Nicola, (2009), pp.29-54.
- CARDINALETTI, Anna - MUNARO, Nicola, (a cura di), 2009. *Italiano, italiani regionali e dialetti*, Franco Angeli, Milano.
- D'ALESSANDRO, Roberta, 2007. *Impersonal Si Constructions: Agreement and Interpretation* (Studies in Generative Grammar), Mouton de Gruyter, Berlin.
- DARDANO, Maurizio - TRIFONE, Pietro, 1997. *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.
- FRAU, Giovanni, 1984. *Friuli*, Pacini editore, Pisa.
- GOIDANICH, Pier Gabriele, 1967. *Grammatica italiana*, IV edizione postuma con note aggiunte dell'autore ed una introduzione di L. Heilmann, Nicola Zanichelli editore, Bologna.
- KEYSER, Samuel Jay - ROEPER, Thomas, 1984. *On the middle and ergative constructions in English*, in *Linguistic Inquiry* 15, vol. 3, The MIT Press, pp.381-416.
- LAFUCCI, Nunzio, 1988. *Oggetti e soggetti nella formazione della morfologia sintassi romanza*, Giardini editori e stampatori, Pisa.
- LEPSCHY, Laura - LEPSCHY, Giulio, 1981. *La lingua italiana: storia varietà dell'uso grammatica*, Bompiani, Roma.
- MARCHETTI, Giuseppe, 1952. *Lineamenti di grammatica friulana*, SFF, Udine.
- RENZI, Lorenzo, (a cura di), 1991. *Grande grammatica italiana di consultazione*; vol. 1, *La Frase; I Sintagmi nominale e preposizionale*, Il Mulino, Bologna.
- RENZI, Lorenzo - SALVI, Giampaolo, (a cura di) [redazione a cura di Anna Cardinaletti], 1991. *Grande grammatica italiana di consultazione*; vol. 2, *I sintagmi verbale, aggettivale, avverbiale. La subordinazione*, Il Mulino, Bologna.
- REGULA, Moritz - JERNEJ, Josip, 1975. *Grammatica italiana descrittiva: su basi storiche e psicologi-*

- che, 2.a ed. riveduta e ampliata, Francke, Bern; München.
- RIZZOLATTI, Piera, 1981. *Elementi di linguistica friulana*, SFF, Udine.
- ROHLFS, Gerhardt, 1968. *Grammatica Storica della lingua italiana e dei suoi dialetti. Morfologia*, Einaudi, Torino.
- SALVI, Giampaolo - VANELLI, Laura, 1992. *Grammatica essenziale di riferimento della lingua italiana*, Istituto geografico De Agostini, Novara : Le Monnier, Firenze.
- SALVI, Giampaolo - VANELLI, Laura, 2004. *Nuova grammatica italiana*, Il mulino, Bologna.
- SENSINI, Marcello, 1999. *La grammatica della lingua italiana. Guida alla conoscenza e all'uso dell'italiano scritto e parlato*, Mondadori, Milano.
- SERIANNI, Luca, 1988. *Grammatica italiana: italiano comune e lingua letteraria, suoni, forme, costrutti*, con la collaborazione di Alberto Castelvechi, UTET, Torino.
- PATOTA, Giuseppe, 2006. *Grammatica di riferimento dell'italiano contemporaneo*, Garzanti linguistica, Milano.
- SCHWARZE, Christoph, 2009. *Grammatica della lingua italiana*. Edizione italiana interamente riveduta dall'autore a cura di Adriano Colombo, 1a edizione italiana, Carocci editore, Roma.
- VANELLI, Laura, 1998a. *I dialetti italiani settentrionali nel panorama romanzo. Studi di sintassi e morfologia*, Bulzoni, Roma.
- VANELLI, Laura, 1998b. *Il sistema dei pronomi soggetto nelle parlate ladine*, in Vanelli (1998a), pp.105-120.
- VANELLI, Laura - RENZI, Lorenzo, 1983. *I pronomi soggetto in alcune varietà romanze*, in *Scritti linguistici in onore di Giovan Battista Pellegrini*, Pacini, Pisa, pp. 121-145.
- YAMAMOTO, Shinji, 1994. *Intorno al clitico si passivante/impersonale in friulano*, in *Il Friuli: lingue, culture, glottodidattica. Studi in onore di Nereo Perini*, Kappa Vu Stampa, Udine.
- 秋山余思, 1990. 「イタリア語辞書についてのいくつかの疑問 (その 1)」『イタリア図書』5, pp.16-24.
- 小川定義, 1992. 「現代言語学の旗手たち 18 デイヴィッド・パールムッター David Perlmutter 正統派の統語論者」月刊『言語』, vol. 21, 6月号, pp.88-95.
- 木内良行, 2005. 「関係文法における日本語受動文の扱いについて」『フランス語の統語論的研究 関係文法の限界と可能性』, p.103-121 大阪外国語大学言語社会学叢書第3輯 劉早書房.
- 小林一宏・清水憲男・松下直弘・Maria Yoldi・岡村一・吉川恵美子, 2003. 『詳解スペイン語』改訂・増補版, 上智大学出版.
- 小林惺, 1975. 『イタリア語小文法』白水社.
- 坂本鉄男, 1979. 『現代イタリア文法』白水社.
- 鈴木信吾, 1991. 「イタリア語とフィレンツェ方言の主語代名詞: 3人称 egli, ella の歴史的展望」『イタリア学会誌』(41), pp. 84-103, 273-274.

- 菅田茂昭, 1989. 『現代イタリア語入門』 大学書林.
- 田所清克・伊藤奈希砂, 2004. 『現代ポルトガル文法』 白水社.
- 田原薫, 1992. 「困る‘ergative’の誤用」 月刊『言語』, vol. 21, 7月号, p.137.
- 長神悟, 1996. 『イタリア語のABC』 白水社.
- 安井泉, 1992. 「特集 現代言語学のトピック 3 “The door opens” <能格動詞と中間動詞>」 月刊『言語』, vol. 21, 6月号, pp.32-35.
- 山本真司, 2010. 「イタリア語の中動態について (その2)」 『東京外国語大学論集』 第 80 号, pp.273-291.